

二〇一四年一〇月三日 開催 〈本学イベロアメリカ言語学科 共催〉

チチェン・イツツアの太陽の刻印

—メキシコのアイデンティティ 密林に眠るマヤ文明の世界—

イスマエル・アルトゥーロ・モンテローロ・ガルシア

(執筆) 柳沼孝一郎

■講演者……イスマエル・アルトゥーロ・モンテローロ・ガルシア(テペヤク大学(メキシコ)大学院課程 研究センター長)

■司会……柳沼孝一郎(本学イベロアメリカ言語学科教授)

はじめに

メキシコ東部、ユカタン半島北部に位置するチチェン・イツツア(Chichen Itza)にあるピラミッド「エル・カステイージョ」(El Castillo)は、二〇〇七年、あるメディアキャンペーンにより「新・世界七不思議」の一つに選ばれていますが、二〇一二年に世界が終焉するというマヤの予言を吹聴していた人たちの象徴的な建物となることで国際的に有名に

なりました。それ以後は、「エル・カステイージョ」の人氣が衰えることはなく、毎年春分の日には「ククルカンの降臨」(Descenso de Kukulcan)を一目見ようと世界中から集まる何千人もの観光客の注目の的になっており、二〇〇五年に米国防空宇宙局NASAがこの現象に関心を向けるほど大規模なイベントになっています。他方、様々な種類の出版物が色々な言語で数えきれないほど出版されていて、真の意味で国際的な名声を得ています。その姿は、世界中の人々が認識できるように非常に象徴的なもので、メキシコのアイデンティティを表す一つのイメージとなっています。それもそのはずで、このピラミッドは人類の創造的天才の傑作を表現する建造物としての基準を満たし、一九九八年、チチェン・イツツアの全ての古代遺跡と共にUNESCOの世界遺産に登録



イスマエル・アルトゥーロ・モンテロ・ガルシア博士



司会の柳沼先生

されました。

最近の研究により、「エル・カステイージョ」は天文台としての役目を果たすために太陽の方角を向いていて、マヤの学者たちはこれを基に暦の調整を行っていたということが証明されています。二〇一三年八月、このニュースは、ラテンアメリカとヨーロッパの多くの国で「ナショナルジオグラフィック」誌の表紙を飾りました。二〇一三年八月号というのは、ナショナルジオグラフィック誌創刊一二五周年記念号の一つで、世界の三二カ国語で数百万部が発行されました。

今回の講演会は、在日本メキシコ大使館のご意向と神田外語大学「東西交流の起源―日本・メキシコ・スペイン交流四〇周年記念講演会」のご尽力により実現いたしました。

マヤ文明

歴史に登場するマヤ文明は人類史上最も傑出した文明の一つとして現在でも我々の想像力を掻き立てるものですが、メソアメリカ(Mesoamerica)古代文明の一翼を担う文明で、その範囲は、現在のグアテマラ、ベリーズ、エルサルバドル、

ホンジュラスの中米諸国と、メキシコのチアパス州、タバスコ州、カンペチエ州、キンタナ・ロー州、ユカタン州を含む広大な地域をいいます。その面積は四五万平方キロメートルにも及び、領域内には、異なる気候、様々な植生環境、そして変化に富んだ地形が存在します。こうした環境の多様性が数世紀にわたって観察され、現代まで継承されるマヤ文明の多様性につながったのです。現在「マヤ地域」と呼ばれる領域は大まかに言って四つの地域に分けることができます。

一般にマヤ文明と聞くと、一九世紀になってようやく発見された、密林の中の失われた都市群という考えが想起されます。しかし、マヤ文明というのは、考古学ロマンが志向するファンタジーを超え、その規模と豊かさによって、時代を超えて世界の考古学の至宝の一つになっていると言えます。それは、中米とメキシコに広がる、大部分がまだ未発見の数千もの遺跡を含む重要な集合体なのです。何十年もの間、多くの研究者たちがこの地域に集まり、それは今日まで続き、そして膨大な量の研究の結果として、私たちはこの文明に対する合理的な洞察を得ることができたと言えます。

「マヤ地域」内部というのは、地理的に不均質であり、文化的に見てもその人間としての表現方法は非常に多様性に富んでいます。「マヤ地域」において形成された社会は時代を通して常に変化しており、建築学的表現、芸術的表現、宗教的表

現の異なる様々なコミュニティが形成されました。しかし、この多様性の中にも、これらのコミュニティを現在私たちがマヤ文明として認識している一つの文明たらしめる重要な類似性が維持されたのです。この意味で、その偉大さはその多様性に根差していると言うことができます。一六世紀にスペインのヌエバ・エスパニーヤ副王領となっても、当地域のプレコロンビア期の民族の多様性は維持され、多くの場合それは現在も存続されており、二五〇〇年の歴史を経てなお称賛に値するモザイク模様を形成しています。

マヤの宇宙観

全ての時代のマヤ人にとって、崇拜の対象として最も高い地位を占めていたのが「太陽」(El Sol)です。ユカタン半島のマヤ人は太陽を「キン」と呼んでいて、これは同時に「時間」を意味していました。その象形文字は四つの花びらをもつクローバーに似ていて、その配置は、夏至と冬至の日の出と日没の際に太陽が到達する一番端の位置に由来すると考えられています。

宇宙とマヤ文明の関係は、建築の面で驚くべき様相を呈している、主要なピラミッド群は天文学上のイベントと関連する特定の方向性をもって配置されていました。過去の巨大な祭祀センターの構造は、非常に宗教的な推論を見せつけるも

のであり、神聖性の表明であり、宇宙の秩序に従うものでした。全てが決まった場所にあるべき理由を持つていたのです。これらの神殿は神性が表出する空間だったのです。

チチェン・イツァ

八〜九世紀の間にユカタン半島南部の壮大なマヤ都市が衰退した後は、メキシコのユカタン半島北部が「後古典期」のマヤ再生の舞台となります。恐らく、その時期の最も有名な都市が「チチェン・イツァ」でしょう。古典期初期の有名な建造物を建立した創設者たちについてはわずかなことしか判明していません。建築様式から判断すると、カンペチエ北部から来たものと推測できます。しかし、九〇〇年頃に「イツァ族」が半島に到達すると、この定住地は急激な変化に見舞われます。一部の資料によると、イツァ族とはチョンタル族の祖先にあたる集団だったようです。マヤの伝説書「チラム・バラム・デ・チュマエル」(Los libros de Chilam Balam)によると、この集団は半島全体に広がり、ユカタン半島を踏破した後、チチェン・イツァの都市に定住しました。イツァ族が支配していた時期にチチェン・イツァはその絶頂に達しました。イツァ族がこの地を選んだ理由は複数あったと考えられます。すなわち、水源(セノーテ Cenote 「聖なる泉」)が存在したこと、緯度的に太陽の天頂通過を記

録するのに極めて重要な場所であったこと、そして、メキシコ湾とカリブ海から等距離の位置にあったことです。イツァ族は半島の海岸線全域に港を築き、広大な商業ネットワークを展開していて、これによりメキシコ北部から中米コスタリカに至る地域の産物入手することが可能だったのです。この商業活動の例として、ニューメキシコのトルコ石、メキシコ西部および中央部の黒曜石、さらにグアテマラやコスタリカのトウンバガ(金と銅の合金)の円盤や小像などが挙げられます。

イツァ族は軍事組織や司祭組織を極めて効率的に管理し、その強力な組織を背景に、チチェン・イツァを拠点とする中央集権政府を築き上げることができたのです。戦いを通じて、半島の村落を服従させることに成功し、貢物を要求し、これにより一二〇〇年頃に衰退するまで二〇〇年間にわたって当地域で最も重要な政治・経済・宗教の中心地として繁栄を極めました。

天文学、幾何学、建築学

チチェン・イツァは当時のユカタン半島で最も重要な政治・宗教の中心地であったため、極めて高い正確性をもって都市計画がなされました。この都市で最も重要な建造物「エル・カステイジョ」(El Castillo)は、天文学、幾何学、建

築学を完璧に融合させて建立されました。「エル・カステイジョ」は宗教的な儀式のためだけに用いられたのではなく、天体観測のための建造物としても機能していました。

マヤ人たちは、一年を通じて日の出から日没まで、太陽がどのように位置を変化させるかを理解していました。天体は毎日動いているように見え、こうした位置の変化により、地平線に対する時間と宇宙の関係を確立することに成功しました。マヤ人は、太陽が周期的に戻って来る厳密に定義された地点上で、宇宙と時間の解説を行っていましたが、こうした太陽の回帰は暦を制御する上で必要不可欠な基準だったのです。

当時の学者たちは「エル・カステイジョ」から色々な角度に立ち、太陽の見かけ上の動きを解説し、光と影の巧妙な作用により補完される位置天文学を展開しました。天文台であるピラミッドから、太陽の「永劫回帰」が記録されていたのです。「永劫回帰」で一番外側に来るポイントが、天頂通過の日の太陽の地平線上での位置であり、この天体イベントに夏至と冬至、春分と秋分、さらに祭祀用の暦に記されたその他の日付が組み合わさっていました。このような知識は、農業の周期と雨季・乾季を同期させるために必要不可欠だったのです。したがって、天体観測は時間を同期させるのに役立っていたのです。

一年のうち、太陽が到達する地平線上の一番端の位置は、夏至と冬至に対応します。日の出または日没の際に太陽が通る軌道のこと、夏至と冬至と間で常に南北に揺れ動く巨大な振り子運動に似ています。夏至と冬至は地平線を利用した暦にとつて鍵となる瞬間で、太陽はこれらの端の地点で四〜五日間止まったように見えます。他方、春分と秋分は、この振り子軌道のちょうど真ん中に当たります。ユカタン半島のように地平線が平らな場合は、その位置が中間地点に正確に記録されます。山の多いメソアメリカのその他の地域では状況が異なり、太陽が山々の背後を通過して高度を上げる際に天空で斜めの軌道を辿るため、観測者は春分・秋分の日と中間地点の一致を確認することができません。春分・秋分の日、太陽が真東の九〇度の方向に現れるのを確認することはできず、最大で三度、あるいは山の高さによつてはそれ以上ずれた形で太陽が見えます。このことから、ユカタン半島平野部での天体観測が極めて重要なものとなったのです。春分・秋分の方角と垂直の方向に、点の北極を確実に設定することができたからです。

想像してみましょう。地球上の任意の場所から、太陽の見かけ上の振り子運動を一年間観察するとします。どこでも、春分と秋分は同じ日付に起こり、太陽はほぼ九〇度の位置から上り、同じく二七〇度の位置で見えなくなります。夏至と

冬至の場合は、状況が異なります。どこでも日付は近くなりませんが、日の出と日没の方向は各地点の緯度によって変わります。しかし、太陽の天頂通過のケースはさらに複雑です。なぜなら、日付も位置も緯度によって全く変わる上、その現象自体、地球の両回帰線内の地域で見ることができないからです。しかし、その特殊性がもたらすこの複雑な文脈が、各古代都市において異なる性格を付与し、私が提起している通り、チチェン・イツツアに関してはその特別な重要性が認められることとなったのです。

太陽の天頂通過は、天空の位置が完全に垂直になる時に起きる自然現象で、空の一番高い場所を通過します。これは一年に二日間だけ起こる現象で、その二日間の正午の時間帯には、横に伸びる影が一切できません。この現象は、北回帰線の南側と南回帰線の北側に位置する地域でのみ確認することができます。これより北または南では太陽が天頂に到達することは決してありません。北回帰線より北に位置する日本の場合も同様です。この現象が発生する日付は、既に述べた通り、各地点の緯度によって変わります。これは地球の回転軸の軌道面に対する傾きにより規定されます。従って、太陽は異なる日に地球上の各地域を垂直に照らし、チチェン・イツツアの場合は、五月二三日と七月一九日の日にこの現象が起こります。

古代メキシコの天文学者たちはこの現象を認識していて、

非常に重要視していました。この現象の体系的な観察が行われていたことを示す考古学的な証拠は、少なくとも、メソアメリカ古代文明を代表する都市であるモンテ・アルバン、ソチカルコ、カントナ、テオティワカンで見つかっています。これらの都市の住民たちは、太陽の天頂通過を観賞するための天体観測所を建設していました。ソチカルコでは、祭祀センターの内部に設備の整った地下室があります。天井に穴をあけ、六角形の煙突がしつらえられており、光の束で地下室が照らし出されます。モンテ・アルバンでは、「Edificio P (エディフィシオ・P: 建造物P)」と名付けられたピラミッドの内部に、ソチカルコの場合と同じ効果が得られるよう暗い部屋が設けられ、煙突により素晴らしい状態で光が入るように設計されています。カントナとテオティワカンでも同様です。チチェン・イツツアでは、この後に見るように、「エル・カステイジョ」の向きがうまく利用されました。

太陽の天頂通過を体系的に記録することは重要で、時間が経つて暦がずれたままにならないよう暦を効率的に調整することを可能にしました。つまり、全ての文明において、暦の修正が定期的に必要なことになるということを理解しなければなりません。例えば、西洋においては、不具合が生じたため、一五八二年にローマ教皇グレゴリウス一三世がユリウス暦をグレゴリオ暦に置き換え、三五二年の第一ニカイア公会議以来

積算されてきた暦から一〇日間を削って解決がなされました。この誤差は、回帰年を数えるための日数の計算が間違っていたために発生しました。こうした混乱は、地球が太陽の周りを回る公転が自転と正確な日数で対応していないという事実によ來します。

こうした状況の影響を受けないようにするための実際的な解決法の一つは、プレコロンビア期の天文学者たちが体系的に行なったと考えられるように、地平線上の印を参照しながら太陽の位置を利用して暦の調整を行うことです。しかし、科学的な手続きには全て確認が必要で、マヤ人はチチェン・イツアで同日に起こる三つの出来事を関連づけることによりこれに成功しました。すなわち、太陽が、「エル・カステイジョ」の北東の角に沿って出てくることを観察し、正午に日時計の指時計針や石碑に影ができないことを確認し、そして最後に、「エル・カステイジョ」の西側の階段の向きが同日に太陽が沈む方向と一致することを利用したのです。

天頂通過の日に、太陽が出て沈む軌道というのは鍵となるポイントで、北緯二〇度四〇分に位置するチチェン・イツアの緯度においてのみ幾何学的に見事な正確性が保たれます。まず、一年間を通して太陽が地平線から上り、沈んでいくのを想像してみましょう。既に指摘したように、振り子運動がアーチを形成し、これも既に述べたように、夏至と冬至

に一番端を通ります。

「エル・カステイジョ」のピラミッドの周囲に、太陽とその他の星が上り、沈んでいく方向があることを想像してみましょう。これは見かけ上のアーチで、地平線はピラミッドを中心に持つ円を形成します。想像の中で、ピラミッドから宇宙の軌道が広がっています。円周を描くには、起源と秩序を形成する中心の役割を担う固定点が必要不可欠で、それが世界軸となります。円周は中心点に依存するのであり、逆ではありません。中心は軌道を通じて地平線または周辺に沿って円を同じ大きさのパーツに幾何学的に分割することが必要です。まずは二つに分割します。そして、東西を貫く直線を想像してください。春分・秋分に太陽が上昇・下降する一番重要な軸です。次に垂直に分割します。中心を通る第一の軌道に沿って分割され、南北をつなぐ宇宙軸が現れます。四つのパーツに分割された円を、さらに半分に分割していき、一六分割されるまで続けます。一六角形が現れます。

ここで、驚くことに、正一六角形の外角はそれぞれ二二度三〇分であり、これはピラミッドの軸が真北に対してずれている角度とほぼ同じです。しかし、これだけではありません。さらに二二度三〇分のパーツを二つ足すと六七度三〇分となり、これは天頂通過時の日の出の方向と一致していて、驚く

ことに、同日の日没の方向は二九二度三〇分で、これもまた二二度三〇分の倍数になっています。正確な北の方角と、太陽の天頂通過の方角が正一六角形内で特定されていることから、私はマヤ人がそれに気づき、壮大なピラミッド「エル・カステイージョ」によってそれを具現化したものだと考えています。時代を超えて不滅の建造物の中に、天文学と幾何学が融合されているのです。

ピラミッドの土台は、一辺五五メートルの完璧な正方形です。その宇宙観を通して考えると、正方形は円に類似しています。厳密な稜線と正確な幅の階段、そしてアルファルダと呼ばれる欄干が一六角形の一六個の頂点を構成するので、正方形は円形を固定化させたものだと言えるでしょう。チチェン・イツァアでは、円形と正方形との関係が並外れた結果をもたらしています。その関係が、この緯度上でのみ可能な天文学的な配置により決定されているからです。もしピラミッドがわずか五〇°Eに南または北に建設されていたなら、そうした一致は消えてなくなりそうです。

皆さんは、こうした正確性は恐らく偶然の産物であり、「エル・カステイージョ」の建立者は、二期にわたる建立段階のいずれにおいても位置決定の基準に従っていないのではないのかと推論されるかも知れません。しかし、この仮説には論拠があるのです。まず彼らが残した記号を見てみましょう。

そこにはこの建物から時間を体系的に計算していたことが示されています。太陽暦との関連はその石段に見ることができず。石段に一年が織り込まれているのです。各面に九一段あるので、四面プラス頂上の一段で、計三六五段になります。すなわち一段が一日に相当するのです。次にこの建造物の厳格な装飾を見てみましょう。各面に五二枚の祭壇画があり、階段を挟んで二六枚の装飾が二グループあることになりました。これは、五二年を一周期とする「メソアメリカ世紀」と関係しています。続いて、ピラミッドの基段を見てみましょう。九つの階層があり、この九という数字は曆学的には「夜の九神 (Nueve Señores de la Noche)」または「靈界 (Infra-mundo)」を意味していました。最後に、九つの階層は欄干(アルファルダ)で二分され、各欄干に対応する九層のグループが各面に二グループあることから、これが曆上の一八か月に対応することがわかります。これら全てのことから、「エル・カステイージョ」が見せる対称性に基づく調和は、一つの建造物を用いた曆の聖性の啓示であり、太陽の「永劫回帰」を崇拜の対象としていたことを明示していたのです。

それでは次に、一六角形に関する理論を見ていきましょう。この幾何学はチチェン・イツァアの文明と無関係ではありませんでした。多角形とは円を分割した結果生まれるものであり、少なくとも「エル・カステイージョ」に奉納された円盤、

すなわち太陽の盾においてそれを見ることができません。この円盤は中央階段の下の方にあった円柱形の櫃の中にあります。この円盤は木製で四匹の蛇のモチーフがあり、トルコ石の装飾は美、年、太陽を想起させます。中央には恐らく、太陽の炎の儀式で使われていた黄鉄鉱の鏡が付いていたと思われまふ。私には、この直線の構図は、中央から周囲へと広がり四つの蛇の頭のモチーフをもつ階段を比喩的に連想させまふ。建物内部から見つかった遺品の一つが、これほど示唆に富んだ形でその幾何学を表現しているのです。一六角形とこれ以上の類似性を示すものは他には見つけることができません。

意図された幾何学模様は、多角形や円形だけにとどまりません。ピラミッドの平面図に注目してみると、正方形も含まれることがわかります。この形状に関しては、マヤ人が正方形の再分割に基づいて幾何学を利用していたことを指摘することができまふ。したがって、ピラミッドの平面図は、階段を境に四つの四角形のパーツに分割することができ、一つの正方形が別の正方形の中に入る形となります。この分割方法は、ガラガラヘビの背中において認識可能なパターン「カナマイテ(canamayte)」に由来していて、この形状は四つの角と四つの辺に基づくマヤの宇宙観を表していました。このモデルは様々な都市の建設において具体化されており、「エル・

カステイジョ」建設に当たっても示唆を与えたことは間違いないありません。メインの石段である北側の階段は、蛇の大きな頭で始まる幅の広い欄干で縁取られており、最上部にある神殿においても蛇の頭が基礎に、体が柱身に、ガラガラヘビが柱頭となつて見えているのが取れ、総体として建築学的に見てヘビを崇拝していたことがわかります。

プレコロンビア期の建造物の位置と向きを決めるにあつたの、地理学的重要性が提起されました。この説に従うと、チチェン・イツツアは地形的に地平線が平らであることがわかります。既に述べたように、山がないことで位置天文学の実践が容易になります。天体が出現して沈んでいくまで、その経路を正確に特定することが可能になるからです。他方、「エル・カステイジョ」は、二つの泉(セノーテ)のちょうど真ん中にあり、この特殊性は既に前世紀から指摘していました。具体的には、北に「生贄の泉」、南に「シウトロックの泉」があります。今日では、この配置は「カンフユムの泉」と東の「オルトウンの泉」により補充され、「霊界」への入り口と関係する重要な配置パターンを形成します。「霊界」とは、地面の下にある世界のことと、神話によると、一度西に沈んだ太陽は、夜の旅を経て再び東から上っていくために、ここを通らなければなりません。二九二度三〇分を向いている「エル・カステイジョ」の西階段は天頂通過時の

日没の方角を指しており、しかも、現在調査中の興味深い奉納物の奉納場所である「オルトウンの泉」の小さな入口に対して、わずか一度しかずれていないというのは、神話地理学的分析にとって非常に素晴らしいことだと言えます。

位置関係について話を進める前に、「エル・カステイジョ」に関して提起されている二二度三〇分という方角は、「戦士の神殿」、「エル・カラコル」の上部構造、「エル・カステイジョ」の建立に用いられたとして、二一度から二三度と誤差は大きかったものの、既に他の専門家によって特定されていたということを断っておきます。メソアメリカにおける天頂通過の研究の追跡調査は最近に始まったことではなく、様々な研究者が重要な貢献をしてきました。例えば、古代メキシコの人々は、地平線上での太陽の見かけ上の動きを考慮し、天頂通過を観察して、都市建設のための場所を慎重に選んでいて、これらのツールにより自分たちがいた場所の地理的位置を正確に把握していたという説が出されたのも、そうした貢献の一つです。

それでは、「エル・カステイジョ」と時間の計算との間にある驚くべき関係を見ていきましょう。「エル・カステイジョ」は太陽が天頂を通過する二日間を示すように向きが決められているので、まずは五月二三日の最初の天頂通過から始めます。この日付に二八日を足すと夏至になります。二八

日というのは月の周期に対応しており、この値は、月の公転周期が二七・三日、満ち欠けの周期が二九・五日という月の基本周期の算術平均により導かれます。同様に、夏至から、七月一九日に起こる二回目天頂通過までも二八日です。二八というのは考慮に値する数字です。一年を二八日の一三周期で分割すると、合計は三六四になります。「エル・カステイジョ」の階段（各面九一段）を想起させる数字です。

次に、「ツオルキン」として知られるマヤ暦の一三という数字（二三日）について考えていきます。この暦では、一か月が一三日、計二〇か月ということを考えており、ここから二六〇日（キン）という数字が得られます。一から一三までの係数と、日を表す二〇の記号を組み合わせるのです。同様に、後古典期のサポテカ族の間では、二六〇日の祭祀用の暦が六五日間ずつの四つの「コシホ」に分割され、各「コシホ」は一三日×五周期で構成され、各「コシホ」が一つの方位点と関連付けられていました。このケースでは、三月一日と天頂通過が起こる五月二三日との間が一「コシホ」であることを指摘しておく必要があります。三月一九日頃に「エル・カステイジョ」で春分の神聖な「ククルカンの降臨」が現れ始めるのは興味深いことです。ククルカンは、「霊界」へと降りてゆくために、「生贄の泉」の方角に滑り降りていくように見えます。光を帯びた一連のダイヤモンド型の鎖をもつ羽毛の

ある蛇の出現は、北側の欄干で何日も見られます。したがって、この現象を天文学上の何らかのイベントや特別な一日と正確に関連付けることは困難です。それでも、建築学と天文学とが組み合わさり、宗教体験という意味では重要なものとなっています。

最後に確認を行います。ピラミッド北東側の頂点の六七度四〇分という方角は、太陽が天頂を通過する日の日の出の向きに合わせて設計されました。この点は強調しておきますが、マヤの建築家たちは、二つの建物を配置する際に、慎重に計画を立てたのです。「エル・カステイジョ」の中心から北東稜線の九つの基段全てを通して直線を引き、その線をメインの広場を通って伸ばしていくと、「大テーブルの神殿」の中心に到達します。

これらの二つの建物の位置関係は、太陽が地平線上に現れるときに完全なものとなります。これを確認するためには、指示された日付に、正確な時間に、適切な場所にいるだけで十分です。私たちはそれを二〇一二年五月二三日に行いました。午前六時から「エル・カステイジョ」の北東角に立って、太陽が「大テーブルの神殿」の上に乗って行くのを待ちました。幸い、大気の状態も良く、建物と太陽が一直線に並ぶのを確認することができました。何世紀にもわたって保存されてきた祖先たちの学識の目撃者になった私たちは幸福感

に包まれ、先達である多くの研究者や資料提供者たちの貢献、そして知識を共有してくれた同僚たちのおかげで、その日は感銘を受けながら事実を知ることができたのです。

結論

マヤ人の宗教的な崇拜のために捧げられた建造物は、宇宙観に由来する思想、すなわち宇宙の働きについてこれらの文明が有していた信仰にしたがって配置されたという説に同意する専門家は日に日に増えています。こうした思想は、古代メキシコでは特に重視され、洗練されていきました。チチェン・イツツアの例は、この説を明確に支持しています。ただし、全ての都市計画がこの基準に従ったわけではないことは指摘しておく必要があります。世俗的な機能をもった建造物は、実用的なニーズに基づいて決定されていたのです。

他のどんな場所よりも方角と配置が結びついていて、神学と恒星の解説が可能であった状況において、北東の「大テーブルの神殿」と西の「オルトゥンの泉」は、「エル・カステイジョ」から神聖性の幕の中に組み入れられました。古典期終末期に築かれたチチェン・イツツアは、一三世紀から徐々に放棄されていきましたが、「エル・カステイジョ」と「生贄の泉」は何世紀にもわたってその重要性が維持され、都市自体が放棄されてもなお崇拜の対象であり続け、また巡礼



会場風景



講演終了後に質問をする学生

の目的地であり続けたのです。

ピラミッド「エル・カステイロ」は、建築を通して表現された先祖伝来の宇宙観そのものであり、太陽の動きと直接関係しています。建物としては、一つの文明において、天文学および幾何学と結びついた信仰を立証する一つのツールとなっています。彼らが使っていたコードと構造はすばらしい一貫性をもって両立しているので、何世紀も後の文明によって解読が可能な一つの言語を形成しているのです。そこで提示されている幾何学的コードと算術的コードは、独自の

思考カテゴリーを形成し、また人類をして宇宙の既知と未知との本物の仲介者たらしめる元型的な現実を表現しています。